

以前、友人の牧師と一緒にキャンプの文集の印刷をしたことがありました。その印刷の途中で紙がなくなり、とても困ってしまったのです。大量に同じサイズの紙を使うことがわかっていながら、あらかじめ用意しておかなかったために生じた不都合でした。

30ページほどの文集の、半分ぐらいまでを印刷した時に、紙が足りないことに気付きました。私はその瞬間、思わず「あ～紙がない」と叫んでしまいました。すると友人がすかさず言ったのです。「教会の牧師にそんなことを言ってもらっては困ります。神がないとは、これいかに。教会にこそ、神がおられるのです」。

以前、礼拝後の報告で、讃美歌90番についてのエピソードをお話したことがあります。その情報源であった新聞記事のスクラップが、最近出てきましたので、改めて紹介させていただきます。7年前の8月29日付朝日新聞の『CM天気図』というコラムに、天野祐吉さんという方が、次のような投書をもたらたと書いておられました。

「アートネイチャーのコマーシャルのバックに流れている曲は、軽音楽風にアレンジされていますが、原曲は讃美歌の90番です。

で、なぜ髪のコマーシャルに讃美歌なのか不思議に思った私は、わが家の讃美歌集をひらいて歌詞を見てみました。すると、2番の歌詞がこうなっていたのです。

『ここもかみの みくになれば 鳥の音花の香 主をばたたえ
あさ日ゆう日 はえにはえて そよ吹く風さえ かみを語る』

神をもおそれぬこの使い方。クリスチャンの私は、一方で神の怒りをおそれながら、その一方で、よくもこの歌詞を見つけたものだと感じてしまいました。『そよ吹く風さえ髪を語る』とは、そのまま絵になる風景ですが、髪の問題はけっきょくは神頼みだということを、このコマーシャルはひそかに言っているのでしょうか」。

神さまを髪の毛にひっかけて、讃美歌90番をコマーシャルに使ったアートネイチャーもすごいと思いますが、そのことに気付いた人も相当すごいと思います。

それにしても、このコマーシャルの狙いが、投書の方のおっしゃるように、「髪の問題はけっきょくは神頼みだということを、このコマーシャルはひそかに言っているのでしょうか」ということであるならば、人間はずいぶん細かい所まで、神さまに依存しているということでもあります。

今から30数年前のことですが、ヨーロッパの学者や研究者の間で、あかちゃんが望んでいることを、どんなことでも無条件で満たしてあげた方がいいか、あるいはそうしない方がいいか、ということ意見がわかれていたといえます。

子どもが何かを望んだ時に、大人からいつでも何でもしてもらえと思わせたり、泣いて要求すれば何でも思い通りになると感じさせる育て方をすることは、よくないのではないか。子どもの依頼心を強くするだけかもしれない。何でもかなえてあげることで、願望

はエスカレートしていくかもしれない。その結果、きわめて依存心の強い、自立をしない子どもに育つ可能性がある、多くの人はそう考えていたのです。

そこで実験をしようということになりました。乳児院で実験的な育児をしたのです。長い時間をかけての研究と観察が行われることとなりました。

例えば深夜の授乳についてです。あかちゃんの夜泣きに対応したり、深夜におっぱいをあげるということのは、多くの母親にとって大変な作業であり、大きなストレスです。

そこで実験では、あかちゃんを2つのグループに分けました。一方は、泣こうがわめこうがとにかく深夜には授乳しない、昼間も規則正しいやり方で決められた授乳の時間は必ず守る、というグループです。もう一方は、あかちゃんが望めばその都度授乳し、24時間あかちゃんの求めるままに対応するというグループです。こちらの方は授乳に限らず、あかちゃんが要求すれば、だっこをしてあげるとか、あやしてあげるとか、遊び相手になってあげるとか、そういうことも全部含めて、あかちゃんの希望しているであろうことは、可能な限りかなえてあげるという育児をするわけです。

深夜の授乳は一切しないというグループでは、早いあかちゃんでは3日目ぐらいから、自分の置かれた状況を理解したそうです。翌日まで待てばおっぱいがもらえるということがわかって、深夜には泣かなくなったのです。ほとんどのあかちゃんが1週間前後で、翌日の朝まで泣かないで、おっぱいを待つことができるようになったのだといいます。2週間を越えてもなお泣き続けるあかちゃんは、例外的にしかいないと報告されています。

3日間にしろ、1週間や2週間にしろ、要求して泣き続けたあげく翌日の朝まで泣かない子になったという実験の結果が、果たして物分かりのよい、忍耐強い、自立心の養われた子どもになったということなのかどうか、そこが問題です。

子どもによっては3日で、翌日の朝までおっぱいを待てるという、現実認識のしっかりした賢いあかちゃんになったのではないか、そんなふうに主張する研究者がありました。規則正しい授乳を含めて、一定の方針に基づいた育児をするのが正しい、それが大切だという主張です。

ところが、それが本当のところかどうかまだわからない。もっと子ども1人1人の個性や、その時々々の要求にしたがって育てるのがいいはずだと主張した研究者もいました。そしてその後もあかちゃんの成長をずっと追跡調査し、観察と研究が続けられたのです。

そして結論です。3日ぐらい泣いたあとは翌日までおっぱいを待てるようになったあかちゃんというのは、いち早く忍耐強い子どもになったわけではなかったのです。むしろ困難に対して早くギブアップする子ども、すぐにあきらめてしまう子どもでした。忍耐強くなどないのです。まったく反対でした。いつまでも泣き続けるあかちゃんの方が、本当は忍耐強い、簡単にはあきらめない子どもだったのです。

何年にも及ぶ追跡調査の結果わかったことは、すぐに泣かなくなったあかちゃんは、現実から逃避しようとする、ちょっとした困難をすぐ回避しようとする、困難を克服するための努力をすぐ放棄する傾向をもつ子どもに成長していったということでした。いつまでも泣き続けるあかちゃん、2週間以上も泣き続けたあかちゃんの方が、努力をし続ける子どもに成長していったのです。

そしてそれ以上に重要なことも、観察の結果わかりました。3日にしろ、2週間を越えてにしろ、結局だめなものはだめということがわかって泣きやむしかなかった、自分の要求は聞いてもらえなかった、願いはかなえられないのだ、そんな経験をして育った子どもの心の中には、ある感情が育ってしまうのだそうです。それは、周囲の人や世界に対する漠然とした、しかし根深い不信感、それと自分自身に対する無力感のような感情です。

それに比べて、深夜であろうとなかろうと、泣くことで自分の要求を表現すれば、それがまわりの人によって満たされるということを経験し続けたあかちゃんは、自分をとりまく周囲の人や世界に対する信頼感と、自分に対する基本的な自信のような感情が育まれるというのです。

誰もが知っていることですが、あかちゃんというのは自分の要求を自分でかなえることができません。おむつが濡れて気持ち悪くても、自分ではおむつを取り替えることができません。いくらお腹がすいても、自分でお腹を満たすことはできません。暑苦しいなと感じても、窓を開けたりクーラーのスイッチを入れることができません。どんなに退屈でも、その退屈さをまぎらわすことはできません。退屈だから詰め将棋でもやろうなどというあかちゃんはいないのです。

あかちゃんは自分のことを自分でできないのです。どんなに寂しい時でも、その寂しさを癒す方法を知りません。なんでも、誰かの手を借りなければならないのです。

できることは、泣くことです。あかちゃんが自分でできる努力というのは、泣くことだけなのです。泣くことで、親をはじめ、まわりの人に自分の希望を伝えるわけです。その伝えた希望が伝えたとおりに、望んだとおりにかなえられれば、そこに相手を信じる心が芽生えます。希望がかなえられればかなえられるほど、相手を信じ、その相手を通して多くの人を信じ、何よりも自分自身を信じることができ、自分がいる環境や世界を信じることができるというのです。

あかちゃんにとって、泣くことは努力です。ですから3日ぐらいで泣くことをやめてしまうというのは心配なことなのです。早く忍耐力がついたのではまったくなくて、努力の放棄なのです。逆に泣き続けるあかちゃんというのは努力家です。努力する素質を持っているということです。まわりの人に依存することによって、自分の命をつなげていくことができ、人を信頼し、自分に自信を持って生きていく能力を身につけていくことができるのです。

あかちゃんの希望や要求はできるかぎりかなえてあげること、あかちゃんの立場からいえば、自分が本当に愛され、守られ、大切にされていることが実感できること、それが基本的信頼感を育むことであるというのが、研究の結論でした。

手のかからないあかちゃんの様子を見ると、大人たちは「いいあかちゃんね」とか「いい子ね」などと言います。確かに大人や親にとってみれば、手のかからない子は育てやすいかもしれません。でもそれは間違いなのです。「いい子」ではなくて「心配な子」です。もしかしたら、泣いても叫んでもだめなんだという、親やまわりの人に対するあきらめと不信感と、自分自身に対する無力感をもって、手のかからない子になっているだけなのかもしれません。

このように、あかちゃんには依存することが大切で、依存することによって人間としての重要な素養が育まれることがわかりました。しかしこれは何もあかちゃんだけの問題ではありません。

私たちは誰でも、依存することなしには生きていけないのです。何にも依存しないで、1人で生きていける人など存在しないはずですが、そのような現実をないがしろにして、私たちは自立することを誇りとします。自立心が強い人を優れた人だと考えます。自立することによって、人間が完成に近づくと考えているふしがあります。依存するのは弱い人間、依存心は弱さの証明、依存ばかりで情けない、そんな風にどこかで思っているはずですが。

そのようなことが、例えば『こどもさんびか』に反映しています。大人が作った『こどもさんびか』は、大人の描く子ども、大人の期待する子ども像、大人の見る良い子を、歌の中に映しだします。

『こどもさんびか』3番「きよいあさあけて」の歌詞にはこうあります。「神さまと人に 心から仕え この日こそ きよい 神の子にしてください」。ここに描かれているのは、神さまと人に心から仕える子どもです。自立しています。自立した上で積極的に仕えるのです。嫌な子どもです。自覚的に人に仕える子どもなど、私は好きではありません。

こどもさんびか52番は「ひかりひかり」という歌です。皆さんもご存じかと思います。「ひかり ひかり わたくしたちは ひかりのこども ひかりのように あかるいこども いつもあかるく うたいましょう」。歌詞のどこにも神さまもイエスも出てきません。出てくるのは「ひかり」ばかりです。おかげでずいぶん前から真光教で歌われています。真光教に盗られたわけですが、確かに真光教のテーマソングみたいな歌詞ではあります。

それはともかく、歌われている内容は、「あかるいこども いつもあかるく」です。いつも明るい子どもなど、なんだかバカみたいです。2節では「げんきなこども いつもげんきで あそびましょう」と歌われています。もう、体力のみといった感じですが。3節になると「ただしいこども いつもただしく はげみましょう」と歌われます。いつも正し

いことなど不可能だと知っている大人が、こんな歌詞を作って子どもに押しつけています。自立心があって正義感の塊のような子どもです。

とにかく昔からある伝統的な『こどもさんびか』に歌われている内容は、自立した子どもです。自立していて、明るく元気で正しく、人に仕えたりするわけです。それに比べると、最近の、比較的新しい『こどもさんびか』は趣を異にするものがあります。例えば、このあとに歌う讃美歌21の60番は、こどもさんびか 103番に収められているものと同じなのですが、イエスの教えをよく表しているという理由で讃美歌21にも取り入れられました。すべての命に優劣の差はなく、等しく神の愛の対象であり、その枠から誰一人もれていないというイエスの福音です。

その60番の3節にはこうあります。「『よいこになれない わたしでも かみさまは あいしてくださる』って、イエスさまの おことば」。

昔の『こどもさんびか』からすれば、これはとんでもないことです。「よいこになれないわたし」です。「いつもただしくはげみましよう」からは正反対と言ってもいいぐらいです。「よいこになれない」くせに「かみさまはあいしてくださる」と喜んでいるのです。

「かみさまはあいしてくださる」なんて、「よいこ」になってから言いなさい。「よいこ」になることの方が先決です。かみさまが愛してくださるのは「よいこ」限定です。もっと自立しなさい。自覚的に清く正しく生きなければだめでしょう。自立して人に仕えるのが神の子・光の子です。「よいこになれない」くせに「かみさまはあいしてくださる」などというのは虫のいい話で、依存のしすぎです。

そんなふうに怒られてしまいそうです。誰に怒られるのかよくわかりませんが。

この讃美歌の作曲者は、自分の作った歌が讃美歌21に収められるということを知って、こうコメントしています。「私の作品が『讃美歌21』に入ったことによって、昔の美しい曲が除かれたのではないのでしょうか」。そんな風に心配したのです。

なんて情けない。そんなのは自立した大人ではない。謙虚にもほどがある。自分の信仰の反映なんだから讃美歌集に入るのは当然だという自立した態度をとるべきだ。

そんなふうに怒られてしまいそうです。誰に怒られるのかよくわかりませんが。

あかちゃんのおっばいの話で見てきたことは、こうです。1つは、無理に自立させようとすると、あきらめや努力の放棄を覚え、まわりへの不信感や自分に対する無力感が心の中に育つということ。もう1つはその逆に、依存心に十分に応えてあげることによって、泣くことの努力が通じることを知り、まわりへの信頼感や自分に対する自信のような感情が育つということ。そしてそこから、人を信じることを覚え、自分のいる環境や世界を信じるができるようになるということです。あかちゃんの依存心に応えることによって、あかちゃんは自分が愛され、守られ、大切にされていることが実感できる。そしてそれが基本的信頼感を育てていくということです。

これは何もあかちゃんのことだけではありません。私たちも同じです。自立することを重んじるあまり、自分の力だけで物事を解決しようとする、何かの壁に行き当たった時に、自分の無力さを知るでしょう。自分では自分のまわりのことがだいたい何でもできるとどこかで思っている、困難な出来事に出会うと、自分の力に無理を感じて、あきらめたり努力を放棄せざるをえなくなるでしょう。自分の置かれた状況の中からまわりを見渡すと、そこには不信感しか残らないでしょう。

イエスは言っています。「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思悩むな」。この言葉の意味は、「依存しなさい」ということだと思のです。生きることにおいて神さまに依存しなさい、もっとイエスに依存していいんだと言っているのだと思のです。空の鳥・野の花がそのまま命を輝かせているように、自分の力に頼るのではなく、神に依存することによって、あなたの命は輝くと言っているのだと思のです。

詩編55：23は、私たちの信じる神がどのような神であることを歌っています。

「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え、とこしえに動揺しないように計らってくださる」

神は私たちがゆだねれば、その依存心に十分に応えてくれるのです。依存心は言い換えれば信仰です。私たちは、あかちゃんが泣くように祈っているのです。祈りの中から神を見つめることによって、神への信頼感は増していくでしょう。自分に対する神からの力を感じることができるようでしょう。そしてそこから、人を受け入れることを覚え、自分のいる環境や世界を、神に与えられたものだと信じることができるようになるはずです。

神は私たちの依存心に応えてくれます。そして私たちは、自分が愛され、守られ、大切にされていることが実感できるはずです。それが信仰を抱いて歩んでいくということです。

「『よいこになれない わたしでも かみさまは あいしてくださる』って、イエスさまのおことば」です。

神に依存することをお勧めします。ただしそれは「こんな私でも愛してくださるのだから、私は何もしない」と開き直すことではありません。人間として成長しようとすることや、生きるための努力を放棄することではありません。どうぞ怠けてくださいとお勧めしているわけではないのです。

あかちゃんだって、泣くことは努力なのです。私たちは、自分に与えられている賜物を用いながら、自分にできることを精一杯つとめながら、努力を重ねることも大切です。

それに加えて、神さまに頼るのです。神は私たちが、ゆだねた重荷に応じて、支えてくれるはずです。

泣き続けるあかちゃんのように、主を求め続けたいと思います。